

# 運動指導における問題を考える

## —教員養成課程も含めたスポーツ教育全体において—

鶴川 是<sup>1)</sup>

A Study on Problem in Teaching Skills

—In all Period of Sport Education including Curriculum of Teacher Training School—

Tadashi Ugawa<sup>1)</sup>

Key words : Teaching to make Students coexisting. Game to be able coexisting while competing

キーワード：共存させる指導

競争しながら共存できるゲーム

### I. はじめに

大学一般体育のスポーツ実習の授業を終えても、生涯スポーツに繋がる技能を持っていない者が少数ながらいると見ている。彼らとその技能を持てる者との間に、どちらに入るかなという者も彼らに連なっているだろう。筆者が担当するテニス、バドミントンなどの授業においてだけでなく、他の教師担当の他の種目においてもである。そこには大学入学者全員にスポーツ履修を必修にしている制度（現在は必修を外している大学もある）や、開講種目が限定されている傾向から生涯スポーツに繋がりにくい種目も履修させられる者もいることや、1クラスの学習者数が40人前後と多い授業体制などが絡んで、筆者を含めた大学の教師が、特に生涯スポーツに繋がる技能を持っていない者たちにあまり指導できない、していないという問題もあるだろう。さらにはそれまで（大学以前の意）のスポーツ教育で、スポーツの仕方や習い方などに関して学習者に積み重ねられてきた考え方や感じ方（スポーツ観、スポーツ教育観など）も関わるものと考えられる。現状のスポーツ教育全体の状況は大ざっぱに言って、スポーツが出来そうな者（以下にはスポーツがの言葉は省く）は一応出来るようになるが、いわゆる出来ない者（スポーツ習得能力が低い者の意味で、以下にはいわゆるの言葉は省く）がスポーツが出来るようになる傾向があり、特に後半部分の傾向は学校でのスポーツ教育の歴史の中で繰り返されてきたと感じてい

る。小、中学生からスポーツ好きの体育嫌いがいると、また大学一般体育が必修から外れると、出来ない者はスポーツ実習の授業を履修しないだろうと言われることなどは、このことを示しているように思える。スポーツ教育全体を終えても、特に出来ない者が生涯スポーツに繋がる技能を持っていない傾向があることの要因を考察していく。その一つの理由として、スポーツ教育全体を通して特に出来ない者への「スポーツ教育の一貫性」<sup>1)</sup>（以下には運動指導の一貫性と記す）が少なかったことが考えられる。

運動指導の一貫性が少なく、出来ない者がスポーツが出来るようになれないことがスポーツ教育の歴史の中で繰り返されている傾向には、教師の運動指導の仕方や考え方や学習者の習い方やその考え方に問題があったと考えられる。教師の運動指導が学習者のスポーツ観、スポーツ教育観形成に大きく影響することを考えると、飛躍し過ぎるかもしれないが、教員養成課程において将来、教師になる学習者への「運動指導理論の指導」と「運動指導の仕方の指導」に、運動指導の一貫性が少なかったことの発端があるのではないかと考える。出来ない者がスポーツが出来るようになる出来ない運動指導が繰り返されてきたことを、教員養成課程も含めたスポーツ教育全体で考え直してみる。

### II. 生涯スポーツと学校でのスポーツ教育との関わり

人間が生きていく上で本来、無理にしくなくてもよいスポーツだから、社会人も生涯スポーツを無理にしくなくてもよいだろう。そんなスポーツを今までは小学生

1) 愛媛大学教育学部  
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,  
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577,  
Japan

から大学生まで長期間、必修にしてきて生涯スポーツに繋がる技能を持っていない者がいることに、体育教師として申し訳ないと感じている。一人ひとりの子どもの将来の可能性を保証するために、義務教育においてスポーツ（スポーツの前段階と考えられる基本の運動なども含む）履修を必修にすることは他教科と同様によいことだろう。しかし学校体育全体でどんな種目をどのように履修させるのか、また指導体制をどのようにすればよいのかというような本来の問題もあり、それらにも触れるべきと考える。しかしそれらに触れると考察が複雑になり、本論で考察したい問題点が曖昧になるだろうから、そこには触れない。

生涯スポーツとは定期的に、継続的にスポーツを生活に取り入れることと考える。スポーツを生活に取り入れるとは、スキー、水泳などにはっきりと競うことをしない場合もあるが、一般的にはその種目のゲームをすることだろう。そして継続できるには、技の仕方、ゲームの仕方において身体に無理のない気持ちよさ、つまり技やゲームがうまく出来るコツやポイントが身につけており、課題解決の面白さや爽快さ、勝ち負けを競う面白さ、さらには技やゲームの仕方の発展などを含む「楽しさ」が必要と考える。お互いが技がうまく出来るようになればおのずと競争場面も難しい課題になり、それに挑戦することにもっと楽しさが増し、人々は生涯スポーツを継続するようである。この他にも生涯スポーツをする者同志の精神的な関わりが及ぼす影響や、健康維持などを意識的に、無意識的に人々は望んで、生涯スポーツを継続しているようである。

学校体育を離れた社会人がスポーツを生活に取り入れられない理由は、次のことなどが考えられるだろう。したいのだがスポーツをする技能が低過ぎて相手をしてくれる仲間がいないことや、あるいは参加してもその場や相手の目指すレベルが高すぎることから技の仕方のコツが身につかないで、前述の楽しさが味わえないことなどが考えられるだろう。この問題は学校でのスポーツ教育全体において解決すべきことで、本論考察の問題意識はここにある。スポーツが出来る技能はあるのだが、スポーツ施設数の不足、その使用料金が安いこと、仕事の関係などでスポーツを生活に取り入れられないこともあるだろう。この問題解決も重要なことであるがここでは扱わない。学校で学習者の時にも、社会人になっても、スポーツに対する考え方も含めていろんな能力の者が、つまり出来ない者、出来そうな者、出来ている者（以下には考察に支障がない限り、後の二者を合わせて出来る者と記す）の三階層の者がいるだろう。特に出来ない者が自分の能力

を知り、技やゲームが「自分なり」に出来る段階があることを実感する必要があると考える。また出来る者が出来ない者の「その者なり」に出来る段階があることを実感し、その段階をある程度は出来る必要があると考える。スポーツをする社会人みんなにこの「自分なり」「その者なり」の実感が少ないと、出来ない者の生涯スポーツは少ないだろう。例えば社会人になってテニスのグラウンドストロークを習う時に、出来る者が出来ない者のラリー相手が出来ることも含む幅広い実技能力を身につけていることや、出来ない者が習い始めから出来る者と同じような打ち方をしても打球をコントロール出来るコツをなかなか身につけられないことを実感、認識しているようなことである。筆者はこの両者の関係を「共存」と呼んでいる。学校でのスポーツ教育を生涯スポーツに繋ぐには、スポーツ教育全体でこの共存する考え方や、共存できる能力を学習者みんなに指導する必要があると考えている。

### Ⅲ. 出来ない者を落ちこぼさない スポーツ教育全体での本来の運動指導

学習者を生涯スポーツへ導く学校体育でのスポーツ教育はもう現実にある。ここでの本来の運動指導とは、特に出来ない者を生涯スポーツへ導くことを目指しての運動指導は、スポーツ教育全体でどうあるべきかを考察していくことである。そしてこの章題は、授業において出来る者のさらなる技の習熟やゲームの仕方の発展を考慮しないということではない。出来ない者を落ちこぼさないためには、むしろ出来る者たちがある意味ではもっとスポーツがうまく出来るようになる運動指導が必要と考えていることである。

#### a 出来ない者の運動能力的な特徴と運動指導

どの学校段階のどの授業にも、普通には前述の三階層の者が40人前後、その割合は異なるにしてもいるだろう。出来ない者といっても、水泳や器械運動は出来るが、球技は出来ない場合や、逆の場合や、いろんな場合があるようだ。少ないようだが中にはスポーツ全般が出来ない者もいるようである。出来ない者とはさまざまな運動の経験が少なく、特に習おうとしている技（運動）に類似した運動の経験が少なく、レディネス不足者である。例えばテニスのグラウンドストロークでなら、相手から緩い打球が来てもよい打点を取る予測能力がない者や、ボールをラケット面の真ん中に当てられない者や、スピード感覚があまりない者などである。小さい時からボールを扱った運動経験が少なく、投げる、受け

るなどの運動もあまりうまく出来ないようである。また出来ない者の多くは、今実施した技で自分の動きがどのようであったかを、つまりどのように間違っただけかを自己観察できないで、その間違いをなかなか修正出来ないようである。

運動指導とは広義には、技の仕方のコツや「ゲームでの動き方」（位置どり、味方との連携、連絡など）などを、教師が学習者に伝えることであろう。ゲームでの動き方を指導するには、先ずは技のある程度の段階までは習得させる必要があり、ここでは技の指導について考察する。技の指導には導入、修正、発展させるなどの段階があるが、最終的には目指す技の「図式技術」<sup>2)</sup>をその学習者に出来るようにさせることであろう。教師は技の仕方の「形」（動きのゲシュタルト）と「感じ」（動きの速さや力の入れ方など）を一体化させ、技が出来るように学習者に指導するのである。「形」とは学習者の動きを教師が「観てとる内容」であり、「感じ」とはその動きを教師が「運動共感」<sup>3)</sup>して「感じ取る内容」である。学習者も教師の示範の動きを観てとり、感じ取るのであるが、出来る者と出来ない者との違いは観てとる能力、感じ取る能力の違いでもある。教師はその違いをしっかりと認識しておく必要があると考える。ほとんどの技において図式技術の「形」は一般化されているだろう。また技によっては出来ない者に対しての導入方法がマニュアル化されているだろう。それらを基にして、クラス全体の状態に、その者の状態に適するように運動課題を与え、修正の指示を出すのが指導であると考え、技の仕方の「形」と「感じ」をどのように説明、示範するのか、そしてそれが学習者に伝わったかどうか、何処がどのように間違っただけかを、それをどのように修正するかなどは、教師の主観的判断を通してであろう。教師は教師自身のその技の運動経験、指導経験、今までの様々な運動の経験、指導経験、運動指導の一般理論などを総動員して、そのクラス全体の状態や、その個人の今の状態などを感じ取り、それらに適する課題を与え、修正の指示を主観的に判断して出すのである。つまり図式技術を出出来ない者の今の状態に適する「形」、「感じ」にアレンジするということである。だから教師の主観的判断を、学習者が主観的に納得出来るかどうかという問題も指導現場では生まれるだろう。これらのことは、技はその仕方を言葉で覚えても出来るようにはなれない、いわゆる身体知であることを、また運動指導とは身体知を教師の身体知で伝えることが含まれていることを意味していると考え、

#### b 技の教え始めには出来る者と出来ない者との「共存させる指導」が必要

スポーツ種目は大別して、個人が、チームが向かい合って競争する対峙型（直接型、入り乱れ型、ネットをはさむ型、野球型など）と、横に並んで競争する横並び型（同時スタート型、異時スタート型）があるだろう。特に対峙型の種目の技の教え始めには、出来ない者たちの能力状態に適する技の仕方のコツを、クラスみんなに指導する必要があると考える。ほとんどの技において、習い始めから図式技術を言葉で説明、動きで示範されても出来ない者には、技が出来るようになれない場合が多いようである。例えばテニスのグラウンドストロークでなら、一般的に言われる相手からの打球のよい打点を取りながらテークバックをして、来ている打球にラケットの振り出しのタイミングを合わせ、よい打点でラケット面を打球方向、角度に向けて当て、面でボールを押し出すようにラケットを振り抜いて打てというような説明、示範をして、出来ない者が速い打球を打つが全く打球をコントロール出来ないようなことである。つまり出来ない者が技を習い始める時には、技の強さ（量的なことで例えば打球の速さなど）を求めることを少し控えて、この段階でならある程度は安定して出来るという技の仕方のコツ（うまさ）を先ずは求める必要があるということである。グラウンドストロークでなら、緩くて短い打球が来るならいつでもある程度は安定して打球をコントロール出来るというようなことである。

「共存させる指導」とは、技の仕方のうまさや強さの求め方も考慮して、単元の始めには出来ない者が出来始める段階辺りの技の仕方を、技が出来ている者にも、出来そうな者にも指導することから始めることである。すると技が出来ている者も、出来そうな者も出来ない者と共存出来る幅広い実技能力も身につくし、後々量的なことを求めてもコントロールもその安定性もある技の仕方が出来ると考える。このように、どの学校段階のどの授業においても出来る者と出来ない者との「共存させる指導」（以下には出来る者と出来ない者との言葉は省く）から授業を始めると、出来ない者には「自分なり」に出来る技の仕方の段階があることを、また出来る者に出来ない者が「その者なり」に出来る技の仕方の段階があることを実感、認識させることになると考える。また横並び型のスポーツ種目でも、量的なことを求めることを控えて出来ない者たちに適する技の仕方のコツをクラスみんなに指導することから授業を始めると、学習者同志の教え合いが生れるだろう

う。

c 出来ない者には特に「個に応じた指導」が必要

先に考察したように、出来ない者たちの能力状態を考えると、どうしても共存させる指導が必要であろう。出来ない者は習得しようとする技に対してレディネス不足であったり、自分の能力状態に到底適さないその技の仕方のイメージを持っていたり、技によっては恐怖感を持っていたり、癖のある仕方を身につけていたりすることでは同じようである。しかし同じ技の同じような課題を実施させても、技の仕方の「形」と「感じ」の現れは個人によってかなりの違いがあるようだ。だから共存させる指導をしていても、出来ない者の一人ひとりの「生の運動」を教師が観察しての「形」と、運動共感しての「感じ」をその出来ない者に適するように修正していくという、その出来ない者の「個に応じた指導」が必要であると考え、特に出来ない者にとっては、この個に応じた指導と共存させる指導がセットで実施される必要があるだろう。もちろん出来る者、出来ている者への指導も一人ひとりの生の運動を教師が観察してすることが原則である。しかし彼らの自己観察能力や修正能力は、出来ない者のそれらよりはるかに高いだろう。出来ない者の能力状態やその多様性を考えると、出来ない者に対して個に応じた指導場面をより沢山つくる必要があるだろう。

d ゲームに入る前に「ゲームの仕方の土台」を指導する必要

特に対峙型の種目では、先ずは技がある程度の段階まで習得出来ない、ゲームでの動き方の習得練習と、習得した技を表現できるようにすることを含むゲーム練習も出来ないだろうし、またゲームをしても「ゲームの過程の良さ」(相手との攻防、味方との連携などがあること)もないし、その発展もないだろう。つまり技とゲームには、技が出来ないとゲームは出来ない、ゲームが発展すると技がさらに発展するという関係があるだろう。スポーツ競技者は試合で「競争しながら共存」(お互いの技を磨き合っている)しているとも考えられる。授業においてもゲームをすることで技の習熟段階を上げるような指導が必要であろう。前述のb、cの指導があって、出来ない者が練習段階ではなんとか技が出来るようになったが、勝ち負けを競うゲームにすぐ入ると折角身につけたコツが狂ってしまうだろう。特に彼らのことを考慮すると、勝ち負けを競わないゲー

ム練習の中で身につけた技を表現出来るようにする、ある程度の練習期間が必要であろう。まさにゲーム練習における出来る者と技が出来始めた者との共存である。そのゲーム練習の中で特に技が出来始めた者に、その種目のゲームでの動き方などを含む「ゲームの仕方の土台」、例えばネットを挟んでの対峙型の種目のバレーボールでなら、代表的なラリーパターンであるサービス、レシーブ、トス、アタック、レシーブ、トス、アタック…のラリーを身につけさせる必要があるだろう。アタックはパスアタックでもよい。同じようにテニスのダブルスゲーム(雁行陣)では、下からのサービス、レシーブ、それからサーバーとレシーバーで何回かラリーをした後、どちらからでも相手の前衛を越すロブ(最初はロブを上げる前に声をかけさせるのもよい)を上げ、上げられた方はパートナーと位置を交代してまたラリーが続けられるようなことである。

教師には、出来始めた者たちの技の習得具合に適したゲーム練習やゲームの仕方を工夫する能力や、彼らとクラスのどの出来る者を組ませてゲーム練習やゲームをやらせるかで、メンバーを選抜する能力が必要であろう。例えば、前述のテニスでのゲーム練習をグラウンドストロークが出来始めた者たちのペアと、それが出来ている者たちのペアとでさせるようなことである。出来る者だけを選抜してゲームをさせることも必要だろう。クラスの学習者数が多いとメンバーを選抜することは難しいようである。また教師には、学習者がゲーム練習をするのに必要最低限の段階まで技を習得していない時は、ゲームはもちろん、ゲーム練習もさせない我慢が必要であると考え、

e スポーツ教育全体で「運動指導の横と縦の一貫性」が必要

特に出来ない者に、技やゲームが出来る段階に「自分なり」があることを、またそれらの発展の可能性にも自分なりがあることを実感させるには、どの学校段階のどの教師も担当する種目の単元内で、技の指導の時に共存させる指導、ゲーム練習でゲームの仕方の土台を身につけさせるために共存させる指導、メンバーを選抜してのゲームや、「工夫したゲーム」をさせるなどの段階を迫る「運動指導の横の一貫性」が必要であると考え、中学、高校、大学で例えばバレーボールの授業をするなら、どの指導段階にどのくらいの時間をかけるかはそのクラスの学習者の状況によって異なるにしても、どの学校段階のどの教師も運動指導の横の一貫性を保つ必要

があるだろう。すると「運動指導の縦の一貫性」も保たれることになるだろう。また例えば中学、高校とバレーボールの授業で「運動指導の横と縦の一貫性」が保たれると、大学でバドミントンの授業を初めて受けるにしても、あまり抵抗なくバドミントンの授業で運動指導の横の一貫性を保てるだろうと考える。つまりどの学校段階のどの種目の授業においても運動指導の横の一貫性があれば、異種目間においても運動指導の縦の一貫性も保てるだろうということである。どの学校段階のどの教師もこれらのことを認識し、それを実践すれば学習者と教師の運動を覚え一覚えさせる関係や、出来る者と出来ない者との共存関係がスポーツ教育全体でうまくいくだろう。つまり出来ない者が自分なりに出来る技の仕方のコツが身につけば、それなりのゲームも出来るし、ゲームをやっていくうちにもっと技の仕方のうまさも伸びていくことを、スポーツ教育全体の長い期間をかけて出来ない者にはもちろんのこと、回りの出来る者にも実感、認識させていくことである。上記のb, c, dの指導は出来ない者を落ちこぼさないための指導原則であり、「運動指導の一貫性」を保つ鍵であると考えられる。

#### IV. 大学一般体育でのスポーツ教育と それまでのスポーツ教育との関わり

##### 1 大学一般体育で運動指導を実践して感じること

出来ない者を落ちこぼさないようにと、Ⅲで述べた指導をテニス、バドミントンの授業で実践する。しかしそれらの指導がしにくいと感じている。筆者の指導能力不足もあるだろうが、それまでのスポーツ教育の影響もあると考える。これらの授業は大学1回生の前、後学期で2種目の履修を必修にして、1コマに3～5種目を開講している中から学習者が選択しての授業である。いろんな能力状態の学習者が1クラスに40人前後おり、週1回、1回90分で13回ぐらいの授業である。学習者の数やその能力状態から初歩的なダブルスゲームが出来るようにと、速い打球（羽）を打つ上からのサービス、スマッシュ、プッシュなどの技は、これら以外の技を使つてのゲームである程度の攻防が出来るようになってから、徐々にゲームに取り入れていくという授業展開をおおむねする。

##### a 技を指導する時に共存させる指導がしにくい事例 〈グラウンドストロークの場合〉

グラウンドストロークがうまく出来ない者に、

よい打点を取りやすい打球を打ってあげられる打ち方をクラスみんなに指導することから共存させる指導を始める。よく弾むボールとそれをよく弾くラケット、つまり道具の特性と出来ない者の能力状態から、教え始めは緩い、短い打球（場面にもよるがサーブラインの内側に落とすぐらい）を少し高いバウンドになるように打たせる。ラケットをゆっくり振ってよい打点で打球方向、角度に面を向けてボールに当て、面がそのままの向きで振り終るぐらいの打ち方を指導する。大事なポイントはよい打点でヒットできるように、来ている打球にラケットの振り出しをゆっくりしてタイミングをあわせることである。Ⅲで述べたように習い始めからラケットを振り抜くと、速い打球にはなるが打球方向が安定しない。そんな打球が来ると特に出来ない者はよい打点を取る練習も、振り出しのタイミングをあわせる練習も出来ないことになる。出来ない者の中には、緩い打球が来てもラケットを一気に振り出し、インパクトで打球方向、角度に面を向けてボールをヒットできないように面を振り回し、ラケットを振り抜いて打つ者が多い。少しグラウンドストロークを習ってきて、まだうまく出来ない者にもその傾向がある。そんな打ち方での打球が出来る者、出来そうな者にいくと、彼らも相手の出来ない者が打てそうな打球を返せないようである。それでも出来ない者の中には何週間も、中には一学期間中、一気にラケットを振り出すことを、インパクトで面を振り回すことをやめない、やめられない者もいる。彼らは打球をコントロール出来るコツを身につけることよりも、速い打球を打たなければと、あるいは打球をコントロール出来ないが打球が飛んでいるからいいと思っているように筆者には見える程である。

グラウンドストロークが出来ている者、それが出来そうな者は、教え始めにはこの共存させる指導に対して怪訝そうな顔をするが、筆者の意図を理解してくれる者は、出来ない者がよい打点を取れそうな打球を打つ努力をしてくれる。しかし、出来ない者の能力状態にもよるが、彼らも緩い、短い打球をなかなかコントロール出来ないようである。そんな打球を打ってあげないとグラウンドストロークを習得する練習が出来ない者がいることを彼らに実感して貰うことも必要なことと考える。一応出来ている者、出来そうな者の中にも、打球をコントロール出来るコツをしっかりと身につけないうちに速い打球を打とうとする者も多い。

授業が進み相手にボレーを練習させる段階になると、相手がその練習が出来ない場合が多い。特に一応出来ている者の中には、緩い、短い打球をコントロールする練習はしたことがなく、なんとなくグラウンドストロークが出来るようになってきたようで幅広い実技能力がないから、出来ない者と共存出来ない者が多いようである。

以上のように、グラウンドストロークの指導で共存させる指導がしにくい傾向がある。出来ている者の中には共存してくれる者もいるが、なんとなく出来るようになった者はあまり共存出来ないようである。出来ない者は、自分の能力状態と自分がしていることとの間に断層があると感じ取れないようである。例えば自分にスピード感覚やラケット面の向きを捉える感覚があまり無いことと、速い打球を打とうとしていることとの断層である。つまり「自分の身体と対話」<sup>4)</sup>出来なくなっているということであろう。そこには次のようなことが入り交じって関与しているようである。自分の間違った動きを自己観察出来なくてどうして出来ないかが分かっていないこと、グラウンドストロークはラケットを振ってしまうものという図式技術のイメージ、つまり低い、長い打球（だから速い打球）を打つものというイメージを持っていること、ラケットを二度引きして振り出す癖（それをするとラケットを一気に振り出すことになりやすい）や、インパクトでラケット面を振り回してしまう癖を持っていることなどである。確かに出来ない者には、来ている打球にラケットの振り出しをゆっくりしてタイミングをあわせることは難しいのだろう。またよい打点が取れないからラケットを一気に振り出すのだろう。そこに道具の特性も加わるから教え始めには、共存させる指導を、つまり打球の速さを求めることを控えて、打球をコントロール出来るうまさ（コツ）を身につけることをみんなに求めたのである。グラウンドストロークで共存させる指導がしにくかったのは、出来ない者に「自分なり」の段階で練習する必要性を、出来ている者、出来そうな者に出来ない者の「その者なり」の段階がある程度は出来ることの必要性を実感、認識させることが難しかったということである。

#### 〈グラウンドストローク以外の技の場合〉

テニスでの上からのサービスを指導する時も教え始めは、レシーブをする者がグラウンドストロークがやっと出来始めた者でも、レシーブ練習

が出来るようなサービスをしなさいと共存させる指導で導入していく。ここでは詳しく説明しないが、サービスの図式技術の「形」に入るまでの三段階くらいの練習の仕方を示して学習者に選ばせる。ラケット面を打球方向、角度に向けてボールに当てられない者には、特にラケットをゆっくり振ってインパクトで振り終るくらいの仕方をやらせる。ベースラインの中からやらせる者もいる。グラウンドストロークのラリー練習時よりも、相手がレシーブ練習が出来るかどうかには関係なく、速い打球（ほとんどサービスエリアに入らない）を打とうとする学習者が多いと感じている。なかなかサービスが出来ない者ほどラケットを一気に振り降ろす傾向が強く、打球を全くコントロール出来ないようである。ここでも打球をコントロール出来るコツを先ず身につけようではなく、打球の速さを求めようとする傾向がある。つまりサービスが出来ている者、出来そうな者はレシーブ側がグラウンドストロークがやっと出来始めた者でも、相手の能力段階を考慮しないサービス練習をする傾向があるし、サービスが出来ない者も自分の能力段階なりのサービス練習をしない傾向から、相手はレシーブ練習が出来ないことになる。ここでも共存させる指導はしにくい。グラウンドストロークや上からのサービスは確かにゲームにおいて普通、速い打球を打とうとする技である。出来る者や出来そうな者が速い打球を打とうとするなら少しは理解できる。しかし出来ない者が打球をコントロール出来るコツを身につけるのを待たないで、速い打球を求めるような動きをする傾向があるのは何故だろうか、また練習場面であるのに出来る者が出来ない者と共存出来ない、しない傾向があることも何故だろうか考える。

グラウンドストロークや上からのサービスが出来ない者は、スイングに力や勢いを使い過ぎてラケット面を特に打球をコントロールすることに有効に使えないようである。時には打球方向、角度にラケット面を全く向けて当てられない程ラケットを勢いよく振って、却って打球が飛ばない者もいる。バドミントンでのロブやロングサービスなどがうまく出来ない者も、スイングに力、勢いを使い過ぎて同じようである。ロブではスイングに勢いをつけるためにバックスイングをしすぎる者や、必ず飛び上がる者がいる。ロングサービスでは、羽をヒットするとすぐにラケットを持っている方の肘を曲げてスイングに勢いをつける者がい

る。それではラケット面の軌道が羽の飛んでいく方向と大きくずれることになる。ロブもロングサービスも羽をうまくコントロール出来ないから相手がドロップやハイクリアーの練習が出来ないことになり、結局、共存出来ないことになる。テニスやバドミントンの技を習うときに、特に出来ない者は自分の能力以上の段階を求めて、うまく出来るようになるのを待てないようである。そこには技をするには力、勢いが必要以上に要するというイメージを彼らが持っているからと思われる。彼らがこのイメージを持っていること、つまり技の仕方のうまさや強さの求め方を間違えている傾向は、大学でのスポーツ教育だけで作られたことはなくて、それまでのスポーツ教育でも作られてきたことと考える。

b 「競争しながら共存できるゲーム」を指導する  
がうまくいかない事例  
〈ゲーム練習の指導について〉

テニスではグラウンドストロークと下からのサービスがある程度出来るようになれば、またバドミントンではショートとロングのサービス、ロブ、ヘアピン、ドロップ、ハイクリアーが出来れば、ゲームでの動き方を含む「ゲームの仕方の土台」を習得するゲーム練習が出来るようになる。どちらの場合も、先に挙げた技である程度自由に打球（羽）をコントロール出来る者たちのペア（台と呼んでいる）が共存してくれないと、それらの技がやっと出来始めた者はそれらの技を表現するだけでも大変で、ゲームでの動き方を身につけることはもっと大変のようである。テニスの場合には、それでも出来そうな者で少しグラウンドストロークが出来ようになった者がゲーム練習を始めた段階で、打球をコントロール出来なくてもいいから速い打球を打とうとする傾向がある。それではグラウンドストロークがやっと出来始めた者はゲーム練習が出来ないことになるだろう。そのやっと出来始めた者の中にも速い打球を打とうとする者もいる。つまりまだゲームの仕方の土台が出来ていないのに、ゲーム練習で競争したがる傾向があるということである。

バドミントンの場合には、先に挙げた五つの技で羽をある程度コントロール出来るようになることも、出来ない者にとっては大変なことのようである。位置どり（トップアンドバック、サイドバイサイド）の練習方法はここでは示さないが、台になるペアがいない時はテニスの場合よりも、

ゲーム練習が出来ないようである。バドミントンでのゲーム練習は速い羽を打つ技を使わないですから、競争したがる傾向は少ない。しかし先に挙げた技がまだしっかり出来ない者には位置どりの練習が難しいようである。難しいというよりその練習を嫌がる者もいる。バドミントンの場合には、ゲームの中で位置どりが出来ないと、テニスの場合よりも各ショットで羽をコントロール出来ないことになる。相手コートに羽を深く入れた時と、浅く入れた時では二人の位置どりが変わるのだが、位置どりが出来ないからなお羽を相手コートに深く、あるいは浅くコントロール出来ないことになり、また位置どりが出来なくなるという悪循環を生むことになる。出来ない者はロブとヘアピンの飛距離の差、ドロップとハイクリアーの飛距離の差があまりない場合が多い。とにかく出来る者に共存して貰い、これらの飛距離の差を大きく出来るようにと指導し、ゲームの仕方の土台が出来るようにと指導するが、どちらの指導も難しいと感じている。

〈ゲームの指導について〉

根気強くゲームの仕方の土台が出来るようにと指導するが、ゲームにおいても位置どりが出来ない者がいる。位置どりが出来ない者はテニスでは少ないが、バドミントンでは多いと感じている。テニスの場合、ゲームを簡単に壊すなど、後衛は相手からの打球状態と自分の能力状態とから判断して四つの打ち方（逃げる、繋ぐ、崩す、決める）を使い分け、相手の後衛を揺さぶり自分のパートナーである前衛にポイントを決めてもらうゲームの仕方をした方が、みんながグラウンドストロークの仕方も、ゲームの仕方ももっとうまくなれると指導する。それが出来ないなら、緩い打球でいいから相手の前衛に取られないで相手コートに入れるようにと指導する。それでも練習でも相手コートに入ったことのないような速い打球を打とうとして（打球が飛び過ぎるから面をかぶせる打ち方が多い）ネットに当てたり、アウトしたり、相手の前衛の正面へ打ったりしてゲームを簡単に壊してしまう者が多い。グラウンドストロークがやっと出来始めた者にも同じような傾向がある。練習で出来るようになったことを、チャンスを作って試すならまだ分かるのだが、上からのサービスも習い始めでもファーストはエースを取ろうと力一杯打ってフォルト、セカンドは下からサービスをして、そのレシーブを強打してア

ウトするというケースもよくある。

バドミントンの場合には、先に挙げた五つの技がやっと出来始めた者には、前述の羽の飛距離の差があまり無い傾向がある。その状態で公式ルールに則ったゲームをすれば、能力のある者にスマッシュやプッシュで速い羽を打たれてすぐに攻防が途絶え、競争しながら共存出来るゲームにはならない。各技がやっと出来始めた者だけを集めてスマッシュ、プッシュを使わないゲームをさせるが、まだ長短の打ち分けが出来なくてお互いが勝とうとするからドライブを使うゲームになる傾向がある。ドライブは速い羽を打つ技でラリーが途絶えることになりがちで、ゲームの仕方の発展は望めない傾向がある。多少、代表的なラリーパターンが入るゲームになっても、習ってきた打ち方とは全く違う打ち方ででも勝ちたがる者が多いと感じている。例えば力を入れ過ぎてハイクリアーを打ったり、飛び上がってスイングに勢いをつけ過ぎてロブをして、とんでもないコースに羽が飛び偶然にポイントを取って喜ぶ者もいる。バドミントンの場合は羽、ラケットが軽い上に、羽がテニスボールと比べて飛び過ぎることは少ないから、その傾向がテニスより強いようである。

どちらの種目でも技の習得、ゲームの仕方の土台の習得迎りまでは、指導すれば出来ない者もそれらがうまく出来るようになるようと努力する面もある。しかしゲームを始めると、ゲームの中でボールや羽をコントロールして競争しながら共存出来るゲームは望めない傾向が強い。ボールや羽をコントロール出来なくてもゲームに勝ちたがる、つまり「過程はどうでも勝てばよい」という傾向が、技やゲームの仕方が少し出来るようになった者や、やっとそれらが出来始めた者の中に強いようである。その場がうわべだけでも楽しければいいという刹那的傾向があると感じている。お互いが自分なりに出来る技の段階をうまく駆使したゲームをして、いつでも技やゲームが安定して出来るようになるよう、技の仕方、ゲームの仕方をもっと発展させようとは考えていない者が多いように感じている。出来ない者も少しは出来るようになって来るが、その者たちが習ったスポーツ種目を生涯スポーツに繋げるだろうという実感は、筆者には残念ながらまだ少ない。

## 2 特に出来ない者にとってのそれまでのスポーツ教育での運動指導傾向

### a 出来ない者を考慮した運動指導が少ない傾向

大学一般体育のテニス、バドミントンの授業で、共存させる指導がしにくい傾向は、それまでのスポーツ教育で特に出来ない者を考慮した運動指導が少なかったことを意味していると考ええる。中学、高校と習ってきている筈のバレーボールの授業で、サービスやアタックの打球が来ると逃げる者を見ることがある。バスケットボール、サッカーなどのゲームで、出来ない者はパスもされなかったと大学生から聞く。また大学生にアンケートをとると、6人制のバレーボールのゲームでアタックをしたことがないという回答や、トスが上がる前にアタッカーが聞く動きをすることを知らないという回答もある。バドミントンのダブルスゲームの位置どりを説明されたことがないという回答、説明はされたが出来ないという回答もある。その回答を裏づけるように高校、大学の体育教師が授業なんだから（部活動ではないのだからという意味と考える）、位置どりまで指導しなくてもいいだろうと言ったり、実際に指導していないのを見たりする。どんな時にサイドバイサイド、トップアンドバックの位置を取るのかを言葉では指導しているのだろうが、それをゲームの中でスムーズに取るようになるゲーム練習は指導していないということである。いろんな種目において技の指導を少し受けると後はゲームばかりをしたということを、しかしそれでも楽しかったということも大学生から聞く。まさに小学校でのドッジボールでは、ボールを投げること、受けることがうまく出来ない者がいてもゲームをすることが多いようである。また高学年になるほど習ってきた種目だからということで、あまり指導しないでゲームばかりをさせる傾向もあったと見る。

「生涯スポーツに通じるということで、学習指導論にプレイ論が入りました。（中略）生涯スポーツに通じるなら、（授業で）プレイさせればいいんだという方向になってしまっている」<sup>51</sup>と述べている教師もいる。

これらを考え合わせるとそれまでのスポーツ教育で、技の指導、ゲームの仕方の指導において出来ない者を考慮しての共存させる指導、つまり運動指導の横と縦の一貫性は少なかったと言えるだろう。さらにはそこに1クラスの学習者数が多いことや、特に出来ない者の運動指導はその者の「生の運動」を観察してその者との「やりとり」



をする必要があり教師にとって大仕事であることや、健康維持や体力づくりのために、あるいは人間形成のためにスポーツをするという昔からのスポーツ手段論の考え方も加わるだろう。授業で学習者を遊ばせたらいいということには、そのスポーツ手段論の考えが暗黙のうちに教師にも、学習者にもあるからと考える。最近、スポーツ教育において出来ない者を考慮する個に応じた指導が叫ばれている。しかしそこには筆者が主張する個に応じた指導とセットで必要な共存させる指導があまり強調されていないようである。

**b 特に出出来ない者には運動を習得することに  
関して「負の積み重ね」がある**

それまでのスポーツ教育において運動指導の横と縦の一貫性が少なかったということは、技の指導方法、ゲームへの導入方法、ゲームの仕方がいわば「一つ」で、極論すればどの学校段階のどの授業においても、そのクラスの学習者みんなに同じ課題を与え、同じように指導してきた傾向が強いつまりクラスの間層である出来そうな者を主対象としてきた指導傾向と言えるだろう。特に対峙型のスポーツ種目ではその傾向が強く、またドッジボールを典型例としてゲームばかりをさせる傾向もあったのだろう。そこに勝ち負けを競うというスポーツの本質も加わり、ゲームに勝つことや、記録が良いことで成績が評価される傾向（この傾向があったことも大学生から聞く）もあると、学習者みんなにスポーツの習い方、仕方などに関して「一つの基準」がつけられるようで、前述の「自分なり」「その者なり」を学習者が実感、認識しにくいのは当然と考える。特に出出来ない者は、技の仕方、ゲームの仕方の指導で段階を追って貰えない傾向があり、各技があまり出来ないまま、ゲームの仕方の土台を身につけられないままゲームをする傾向が強かったようである。その上みんなと同じ土俵で競争ばかりをしてきたら、出来ない者には力任せでもゲームに勝てばいいという雰囲気生まれ、出来る者と早く同じようにならなければというイメージを知らぬ間に持ってしまう、スポーツをするには力や勢いが必要以上にいるというイメージが身体に染み込み、その動きが癖になってしまうだろう。小学校から大学までスポーツ教育の時間は充分あるのに、出来ない者にとってはいつも運動能力的にも、精神的にも余裕のない指導傾向から、彼らは自分の身体と対話出来なくなり、運動習得

に関して「負の積み重ね」を持ったと考える。

学年が進むにつれ、出来ない者が「一つの基準」に従わねばというイメージを持ち、自分の身体と対話出来なくなる傾向も、もちろん負の積み重ねであるが、彼らが高校生、大学生になるとスポーツに対して虚無的、利他的態度になっている傾向が最大の負の積み重ねであると考えられる。なにがなんでもゲームに勝たなければというように一つの基準が作られ、出来ない者にはその裏返しとして、どうせやっても自分には出来ない、うまく出来なくてもその場が楽しければいいというような態度である。彼らは技やゲームの仕方がうまくなっていく過程を経験をしたことがないのではないかと思える程である。もっと言えば彼らは授業でうまく出来るようにならなくても遊ばせて貰えばいいという思いを持ち、筆者は授業で彼らなりに技やゲームがうまくなるように、出来れば生涯スポーツへ繋がるようにという思いを持つが、この思いの違いが大きいように思える。出来ない者にとってのこれらの負の積み重ねを壊すにはスポーツ教育全体において、横と縦の一貫性ある運動指導をこれから続ける必要があると考える。前節で大学一般体育のスポーツ教育で、出来ない者の個に応じた指導がしにくいことも述べたかったが、それはこの負の積み重ねを壊すことが難しいということである。出来ない者の個に応じた指導には、もちろん動きの欠点の修正や癖の修正なども含まれるが、スポーツに対する価値観を広げるようなことも含まれると考える。つまり自分の身体と対話しながら段階を踏み、時間をかけ、出来る者に共存して貰えば、スポーツがうまくなるようになり、その楽しさが分かるということを実感、認識して貰うことである。またそれまでのスポーツ教育において特に出出来ない者に運動習得に関して負の積み重ねをする指導をしており、大学一般体育でスポーツ履修を必修にする制度も問題があると考えられる。筆者の指導能力不足もあるが、彼らにも責任が取れる指導体制や履修制度を考えていく必要があるだろう。

**V. 教員養成課程における運動指導理論の  
指導と運動指導の仕方の指導**

スポーツ教育全体を通して、特に出出来ない者に運動習得に関する負の積み重ねがあったと考察してきた。この要因は、教員養成課程における運動指導に関するこの指導に発端があると考えている。

### a 運動指導理論の指導傾向

#### 〈運動指導理論に関する学問分野と自然科学的運動研究〉

運動指導理論に関する授業には運動生理学、体育科教育学、バイオメカニクス、運動学などが挙げられるだろう。これらはまさに体育専攻生の運動指導に関する卒業論文研究の分野でもあるだろう。運動指導理論では習う運動(技)を習う者に発生させるには、どうしたらいいかということが中核の問題と考える。運動を発生させるにはどんな身体条件が有利かというような問題を扱う運動生理学や、また学習活動のどんな指導、学習環境が有効かというような問題を扱う体育科教育学のような分野がある。しかしこれらは習う者に運動を発生させるにはどうしたらいいかということには直接関係しない分野である。本論では特に出来ない者に運動を発生させるには、運動の何をどのように伝えるかということが問題で、ここでは「運動そのもの」を扱う分野で運動指導理論を、運動研究を体育専攻生にどのように指導してきたかを考える。

筆者の経験からは、運動指導理論に関する授業、研究(教員養成大学の教師の研究、卒業生の卒業論文研究を含む)は「運動そのもの」を扱う分野よりも、運動生理学や体育科教育学の分野が多かったように思われる。「運動そのもの」を扱う分野にしても、特に研究においては運動経過がどうなっているかを、その時間的、空間的变化を数量化して自然科学的に研究する分野が多かったように思われる。そこには運動を発生させるには運動がどうなっているかを調べなくてはという考えもあったのだろう。しかし運動経過を数量化することは、その実施者のその運動に対して持つ価値や意味、運動感覚的なことなどを捨象し、また研究者が持つ運動感覚的なことによる判断(主観)も出来るだけ入れないで一般的な理論(客観)を出そうとすることを意味するだろう。運動経過の時間的、空間的变化を数量化して理論を出すことは、人間の運動に対する時間、空間感覚などがみんな同じと前提して研究していることであり、問題があると考え。つまり当然すぎることであるが、運動経過の時間的、空間的变化が数字でいくら詳しくこうなっていると分かっても、教師が学習者にその運動の仕方のコツを簡単には伝えられないということである。そこには人間は同じ感覚器官を通して同じ情報が入るのだから、みんな同じように物事を感じ、認識とする機械論的人間観、つまりことがらに関しても誰にも妥当する客観が初めからあるとする人間観が関与していると考えられ

る。さらには人間には、自分が生まれた時代にある価値観、慣習などを疑わずに取り込んでしまう人間の宿命のようなものがあり、特に20世紀には自然科学の威力で人間が物質的に便利で豊かな生活が送れるようになり、自然や人間に関して分からないこともすべて自然科学的に解明出来るという錯覚を人間が持ったことも関与していると思われる。

機械論的人間観、自然科学の威力と人間の宿命などから、運動経過を自然科学的に研究して一般的な指導理論を出せば誰にでも指導できる、いわば理論を実践にはめ込めば指導出来るという、研究の方が指導実践より上位概念であるという考え方が主流となった傾向があるように思える。前章までに考察してきた今までのスポーツ教育全体で出来ない者を考慮した指導が少なかったこと、クラスの中に出来ない者がいても1クラス40人前後の学習者数が少なくとも50年近く変わらなかったこと、技の指導を始める時に市販ビデオの映像のように格好よく示範をする教師がいることなどは、この理論を実践にはめこめば指導が出来るという考え方の現れと考える。つまり出来ない者の状態を教師の主観で判断することなく、図式技術を彼らに適するようにアレンジしないで指導してきた傾向であり、また出来ない者の運動習得に関する運動感覚的なことや、その運動に持つ意味や価値なども、出来る者のそれらと同じように扱ってきた指導傾向である。前述した特に出来ない者が「一つの基準」に縛られ、みんなと同じようにならなければというイメージを抱く発端は運動を自然科学的に研究してきたことにあるように思える。

#### 〈現象学的人間観と運動学〉

ことがらに関しても誰にも妥当する客観が初めからあるとする機械論的人間観が、一般的な指導理論で誰にでも教えられるという考え方を主流にし、指導実践の中から指導理論が生まれるという考え方を薄れさせたものと考え。そこには人間はすでに持っている考え方や知識などによって、自分の前に現れた物事の感じ方、認識の仕方は異なるという人間観が確立していなかったということであろう。この人間観であれば客観についても機械論的人間観における客観とは違って、「間主観的に納得(共感)が得られて客観が生まれる」<sup>6)</sup>と考えるのである。例えばテニス界にピヨン・ボルグのトップスピンの打ち方でグラウンドストロークが現れた時に、それまでフラットの打ち方を当たり前(客観)と認めていた人たちは、それを邪道だと評したそうであ

る。しかしそれを自分の主観で納得する人が多く現れたから、トップスピンの打ち方は客観として世の中で認められたということである。このいわば現象学的人間観を教師が持つておれば、運動指導の時にも特に出来ない者に今の世の中にある一般的な運動指導理論（指導マニュアルも含む）を当てはめよう（運動指導とは全てこうであると考え）としても、その出来ない者がその運動に対して持っている運動感覚的なことや意味、価値を大事にしてあげる指導がなされると考える。例えば出来ない者の「生の運動」を教師が観察し、運動共感してその個に応じた指導をする必要があると前述したことで、これはいわば実践からの理論であると考え。この実践からの理論が「間主観的に納得が得られる」と、それがまた一つの指導理論として世の中で認められるものと考え。今まで出来ない者を考慮する指導が少なかった傾向は、この現象学的人間観が確立されていないまま、機械論的人間観に基づく理論による指導からと考える。確かに今までの指導実践においても、出来ない者を何とか指導しようとした教師も多いただろう。しかし1クラスの学習者数が多かったこと（これも機械論的人間観によるものと前述した）や、世の中の効率主義や教師も楽に教えたいという欲も手伝って、機械論的人間観での指導理論に出来ない者もはめ込む指導傾向があり、スポーツ教育全体では出来ない者を考慮する指導は少なかったものと考え。

一般的な指導理論にみんなをはめ込むだけで運動指導が出来るのなら、スポーツが出来ない者はいないことになるだろう。指導実践の中にも理論があるという考え方がないと、出来ない者を考慮する指導理論は生まれてこないのではないかと考える。出来ない者と出来る者の運動感覚的なこと、その運動に持つ意味や価値が異なっていることを大事にしての運動指導の考え方や理論を、運動研究の仕方を体育専攻生に指導するのが「運動学」<sup>7)</sup>という分野と考える。その意味では運動学は実践の中に理論があるという考え方で、どうしたら習う者に運動を発生させられるかという方法を見つけるために、指導対象者の、研究対象者の「生の運動」がどうなっているかを教師が、研究者が持つ運動感覚的なことを活かして指導することを、研究することを体育専攻生に指導することが運動学の主な内容と考える。自然科学的な運動研究では、運動経過の時間的、空間的変化を数量化して身体や物のスピードや角度の変化をグラフにしたものや、スティックピクチャーを描いた研究が多かったようである。その研究された運動

の運動感覚的なことを持っている指導者がその研究結果を見ても、その動きの「形」や「感じ」がどうなっているのかというイメージはほとんど湧いてこないだろう。運動学的研究では、研究対象者の動きの「形」や「感じ」を出来るだけ指導者に分かって貰うために、その「運動形態」<sup>8)</sup>を研究する。例えばある技の連続写真のようなもので、その技の運動感覚的なものを持っている指導者が研究結果を見れば動きの「形」がよく分かるし、この辺りで力が入ってきているなという「感じ」などが分かるというようなことである。つまり研究対象者の生の運動に近い状態をペーパーに載せ、研究者の意図することを指導者に伝えようとするのである。それでもペーパーになった運動学的研究結果を、指導者が見てもその研究者の意図が指導者に伝わるには限界があり、また例えその意図が伝わったとしても指導実践が重要になってくる。要するに運動を伝えるということは、その指導者とその学習者の間に「運動感覚的な共通のチャンネル」<sup>9)</sup>があるかどうかということが重要なことであり、このことは当然なことであるが、研究も大切だが指導実践がもっと大切であることを意味していると考え。しかしまだ自然科学的運動研究が多くなされている傾向があり、前述したようにその研究結果は特に出来ない者への指導実践には掛け離れていることを考えると、指導者と学習者の運動感覚的な共通のチャンネルを大事にして、指導理論を指導実践に繋げようとする運動学は、指導実践と共に重要な分野と考える。運動を覚え—覚えさせる関係において運動感覚的なことを大切にするには、その場面で指導者、学習者お互いが自己観察、他者観察をして運動共感する必要がある。この運動共感も両者の身体内でどのように起こっているのかが曖昧であることも含み、この運動感覚的なことは数量化しにくいということからも、運動学での運動指導理論がまだ重要視されていない傾向があるものと見ている。

#### b 運動指導の仕方の指導傾向

出来ない学習者に技を発生させるには、出来ない学習者が技が出来始める段階辺りの仕方の運動感覚的なことを教師が持つ必要がある。その段階辺りの仕方が出来ることも含めて、授業で運動指導するのに必要最低限の実技能力を持つ必要があるだろう。例えば泳げない教師は泳ぎ始めた学習者の運動感覚的なことは分からないだろうし、教師にも能力に限りがあり、いろんな条件もあるから、教師みんながトップレベルのスイマーになれる筈もないだろ

う。ところが体育専攻生は一般的には運動能力が高い者たちであり、また教員養成大学の教師も一般的には出来る者たちである。それぞれ両者は簡単な技は苦勞なく出来るようになっており、出来ない者がそれらの技が出来始める段階辺りの運動感覚的なことをほとんど実感していないだろう。後者はたとえ苦勞して身につけた技でも、出来始めの頃のことはもうすっかり忘れていないのではないだろうか。さらに両者が出来る者の集まりだから、どちらかと言えば後者は前者の実技能力を高めることに、前者も自分の実技能力を高めることに専念するようであり、後者は前者が教師になった時に出来ない学習者に指導するのに必要な技の仕方の段階辺りを前者に経験させることも、その指導方法を指導することもほとんどしないようである。実技能力を高めることは、前者が教師になった時に指導に自信がもてるようになることであり問題はない。前者が教師になった時に、特に出来ない学習者と運動感覚的な共通のチャンネルを持てるような指導が少ないことが問題なのである。つまり今までの教員養成課程において、出来ない学習者が技が出来始める段階辺りの運動感覚的なことを実感していて、彼らの生の運動を観察、運動共感して個に応じた指導が出来る教師があまり育っていなかったと思われる。出来ない学習者の個に応じた指導が出来ないことは、出来る学習者へ出来ない学習者が技が出来始める段階辺りを指導することも出来なくて、共存させる指導が出来る教師も育っていなかった傾向があるということであろう。

運動指導理論を体育専攻生に指導する時に、運動感覚的なことはもとより、学習者と運動感覚的な共通のチャンネルを教師が持つ必要があることは、ほとんど問題にされない指導理論が指導されてきた傾向があると先に考察した。教員養成課程の理論と実技、両方の指導において、特に出来ない学習者と運動感覚的な共通のチャンネルを持たない教員養成傾向が続くと、スポーツ教育全体において出来ない学習者が出来始める段階辺りの技の仕方を、出来ない学習者にはもちろん、出来そうな学習者にも「空白」にする指導傾向が続くことになるだろう。この「空白」が、つまり「共存させる指導」が少ないことが今までのスポーツ教育の歴史の中で、出来ない学習者がスポーツが出来るようになれないことが繰り返されてきたことの要因と考える。要するに運動を伝えるには、それまでの世の中にある指導理論（客観）を基に伝えるにしても、教師、学習者が自分の主観を大事にしなければいけないという原則を、体育専攻生に指導してこなかった傾向があると

考える。今までは、世の中にある一般的な指導理論に出来そうな学習者をはじめ込む指導の形で、彼らは一応スポーツが出来るようになったのだろう。だからその指導理論に出来ない学習者をはじめ込む指導を反省しない傾向が、またスポーツが出来ないのは出来ない学習者の努力が足りないと言われてきた傾向があるのではないかと考える。

## VI. ま と め

- (1) スポーツ種目は大別して対峙型と横並び型があるだろう。スポーツ習得能力が低い、いわゆる出来ない者をスポーツ教育全体で落ちこぼさないようにするには、どの学校段階のどの授業においても、特に対峙型の種目の授業においては、以下の指導段階を踏む必要があると考える。①. 技の指導において出来ない者と出来る者とを「共存させる指導」、②. ゲーム練習においてゲームでの動き方を含む「ゲームの仕方の土台」（代表的なラリーパターンなど）を身につけさせるために、技が出来始めた者と出来る者とを「共存させる指導」、③. 技が出来始め、ゲームの仕方の土台が出来始めた者のそれらの習得段階に応じた「工夫したゲーム」をやらせることなどの指導段階である。
- (2) 大学一般体育でテニス、バドミントンを指導していて、先の①、②、③の指導がしにくいと感じている。技を習い始める時に、いわゆる出来ない者は、技の仕方のうまさ（コツ）より強さを求め自分なりの段階を踏まない傾向がある。また技が出来そうな者、一応出来ている者は、出来ない者が出来始める段階辺りの技の仕方を指導するが、それを身につけようとしないで、やはり技の仕方のうまさより強さを求め幅広い実技能力を身につけようとしない傾向がある。つまり①の指導がしにくい、②の指導も当然しにくいことになる。③の指導はゲームをしても「競争しながら共存できるゲーム」が出来ようになることがねらいである。「工夫したゲーム」をできるだけやらせるが、「過程はどうでも勝てばよい」というようなゲームをする傾向が強くと、③の指導もしにくい。
- (3) (2)の傾向は筆者の指導能力不足、テニス、バドミントンの種目特性も関わるかも知れない。しかし大学一般体育だけでの問題ではないと考える。大学生のいわゆる出来ない者は、出来る者と同じようにならなければならないイメージや、スポーツをするには力が必要以上に要するというイメージやその癖の動き

を持っていることから、技やゲームの仕方において自分なりの段階を踏みながら発展していこうとはしない傾向が強くと見る。それはそれまでのスポーツ教育において、いわゆる出来ない者は、技が、ゲームの仕方の土台がまだ満足に出来ないうちにゲームをやらされてきた傾向があるからと考える。つまりそれまでのスポーツ教育においても、①の指導がほとんど無かったことに端を発して、先の②の指導もあまり出来ないまま、ゲームに入った傾向があるということである。今までのスポーツ教育の歴史の中で、いわゆる出来ない者を生涯スポーツに導くことが少なかった傾向があると見ているが、この①の出来る者と出来ない者とを「共存させる指導」が少なかった傾向にその要因があると考え、

(4) 今までに「共存させる指導」が少なかったことの要因は、教員養成課程における運動指導の仕方の指導と、運動指導理論の指導にあると考える。いわゆる出来ない者に技を発生させるには、出来ない者が出来始める段階辺りの技の仕方の運動感覚的なことが教師に分かる、つまりその仕方が出来る必要がある。ところが教員養成課程の教師も体育専攻生も一般的にはいわゆる出来る者の集団であり、前者が後者に出来ない者が出来始める段階辺りの技の仕方を経験させることも、その出来始めの仕方の指導方法を指導することも少なかっただろう。また運動指導理論の指導では、運動経過の時間的、空間的变化を数量化して自然科学的に研究する分野の指導理論を教える傾向が強かったと見る。この運動研究は、極論すれば、時間、空間感覚が人間みんな同じと前提して指導理論を出していることであり、特に出来ない者の運動感覚的なことを大事にしない教師が育つことになる。教員養成課程の実技と理論の指導でこんな傾向があれば、いわゆる出来ない者を指導出来る教師が育たないことになり、教師がいわゆる出来る者に出来ない者が出来始める段階辺りの技の仕方指導出来なくて、「共存させる指導」が今までのスポーツ教育において少なかったものと考え、指導者と学習者の運動感覚的な共通のチャンネルを大事にしての指導理論を出し、それを指導実践に繋げようとする運動学は、いわゆる出来ない者を考慮する運動指導が出来た教員養成には特に必要な分野と考える。

## 注

- 1) 拙論「スポーツ教育の一貫性について考える」体育科教育学研究, 第9号, 1992年, pp.33-44.
- 2) 運動学用語解説で『個人的に実現されたあるすばらしい運動習熟が他の人に伝播され、そこに個人的特殊条件によって左右されない、一定の公共性をもった運動形態が認められたときに、はじめて運動技術が問題になる。この意味の運動技術は「図式技術」といわれ、それは(中略)理想型という機能をもった運動形態と解されて、運動学習においてその習得がめざされる」と説明されている。金子明友・朝岡正雄編著「運動学講義」大修館書店1994年, p.257.
- 3) 「他者の運動をとくに興味深く熱中して観察しているときに生じる同時体験。(中略)この運動共感の能力を通して、われわれは他者の運動をあたかも自分がやっているかのようにとらえることができ(中略)実際に行うときに生じる運動覚を自分のものとして感じ取ることができる」と運動学用語解説で説明されている。前出(2) p.257.
- 4) 金子明友「動きの発生と伝承」金子明友監修「教師のための運動学」大修館書店1996年, p.4.
- 5) ( )内は筆者が書き入れた。意味、内容に変わりはないと考える。宇土正彦他数名, 座談会「新しい教育課程の方向」『学校体育』1997, 10月号, p.34.
- 6) 竹田青嗣「自分を知るための哲学入門」ちくまライブラリー1990年, p.59.
- 7) マイネルの運動学が「教師が、いつ、何を、どのように、なぜ教えるのか」という基本的な問題に対する重要な基礎」を提供していることを、吉田が詳しく紹介している。参照されたし。吉田茂「運動指導のモルフォロジー」前出(4) p.17.
- 8) 吉田がマイネルの運動学を紹介しながら、運動指導にモルフェ(運動形態)を研究する「モルフォロジー」が必要であることを説いてる。参照されたし。吉田茂「運動指導のモルフォロジー」前出(4) pp. 14-24.
- 9) 編者の吉田がこの言葉を使用している。前出(4) まえがき i